



題字揮毫・故 瀬島龍三氏

第48号

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

〒102-0072 千代田区飯田橋-5-7
東専堂ビル2階

電話: 03 (6380) 8943
FAX 03 (6380) 8952
<https://ireikyou.com>
振替口座 00140-6-334930

編集人 圓 藤 春 喜
発行人 國 澤 輝 生
印刷所 島根印刷株式会社

目次

年頭のご挨拶	1
あの戦争を振り返り戦没者の霊を慰める。(第一回)	3
ガダルカナル島の戦い	8
(二) 一木支隊の戦闘	13
硫黄島遺骨収集に参加して想うこと	15
事務局からの報告等	

年頭のご挨拶



島村宜伸会長

となり、天皇陛下は昨年十月の即位礼正殿の儀のおことばにおいて、上皇陛下が三十年以上にわたるご在位の間、常に国民の幸せと世界の平和を願われたことに触れられご自身も同様に願われていることを述べられ、国民の叡智とたゆみない努力によって、我が国が一層の発展を遂げ、国際社会の友好と平和、人類の福祉と繁栄に寄与することを切に希望されました。

米国は、トランプ大統領が就任して三年目を迎え、中国に対する関税引き上げ等、「米国第一主義」の色彩がより一層濃くなりました。

中国は、強固な習近平独裁体制のもと、米国との関税問題については対抗姿勢を明確にし、一帯一路構想に基づく諸外国への経済支援の活発化、南シナ海軍事拠点の維持強化など、経済力・軍事力を背景とした拡張主義が益々顕著になっております。

我が国自身、周辺情勢に惑わされず、毅然とした自主独立の姿勢を堅持することが今ほど求められている時期は、かつてなかったと考えます。

国内においては、豪雨、台風等大きな災害が続き、多くの国民が甚大な被害に見舞われた一年でもありました。

新年おめでとございます。
会員の皆様並びに戦没者慰霊諸団体の皆様にはご家族共々良いお正月をお迎えのこととお慶び申し上げます。
また、旧年中は、本協議会の活動に多大のご協力、ご支援をいただき心からお礼申し上げます。
新しい御代、令和も二年を迎えるこ



靖国大絵馬は、愛知県名古屋市の伊勢絵馬協賛会安田織人氏から御祭神奉慰のため昭和五三年から奉納いただいているもので、横二・七六m、高さ二・一九mのジャンボ絵馬として新春の靖国の名物となっている。

安倍内閣による安定した政権運営がなされ、経済面においても株価、為替が安定し、主要な企業が業績を伸ばした年でもありました。

協議会の活動については、七月六日に例年どおり靖國神社において本協議会と慰霊諸団体が合同で主催し、「令和元年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」を、二二五名（在宅参拝者を含む）の多数のご参加をいただき、厳肅に執り行いました。ご協力ご支援いただいた会員並びに慰霊諸団体の皆様に厚くお礼申し上げます。

次に戦没者遺骨収集については、「戦没者遺骨収集推進法」に基づき設立された「(一社) 日本戦没者遺骨収集推進協会」(以下推進協会という)の活動について、当協議会も、慰霊諸団体のご意見をいただきながら、社員団体の一員として推進協会の活動に積極的に提言するとともに慰霊諸団体から遺骨収集活動に参加いただき、異郷の地で帰国を待ちわびておられる一二万余の戦没者が、一日も早くご帰還を果たされるよう尽力しております。

新しい年を迎え、天皇陛下の御心に添うためには倍旧の努力が必要な時代

であるとの認識を新たにし、昨年の旧懐とともに、本協議会の使命の重大性と寄せられる期待の大きさに改めて身の引き締まる思いがしております。

令和二年の協議会活動ですが、柱の一つであります「戦没者慰霊崇敬思想の普及」については、戦友・遺族の老齢化とともに、我々の先輩が大東亜戦争を戦った意義、その苦闘の歴史、加えて大東亜戦争が果たした歴史的役割を知らない世代が増えております。今年も引き続きこの世代に焦点を当て、啓蒙活動して参りたいと思っております。

もう一つの柱であります「戦没者慰霊事業の継続」につきましては、例年同様、慰霊諸団体と合同の形で、七月四日に靖國神社において「令和二年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」を執り行いますので、ご協力ご支援よろしくお願い致します。

また、戦没者遺骨収集については、推進協会の本格的活動が三年目を迎え、益々の活動が期待されます。当協議会は今後も遺骨収集の抜本的推進に鋭意力を藉すとともに、遺骨収集参加を希望される慰霊諸団体の会員の皆様のご要望に応えるべく引き続き努力する所

存ですので、諸団体におかれましてはご意見、ご要望がありましたらお聞かせ下さい。

旧年を回顧し、新年への思いを記しましたが、私自身これらを思い描きながら、心新たに年頭の靖國神社の神前に額づきたいと思っております。本年も、ご協力ご支援の程をよろしくお願い申し上げます。

令和二年 元旦

公益財団法人

大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

会長 島村 宜伸



謹賀新年

公益財団法人 偕行社

会長	志摩 篤
相談役	富澤 暉
理事長	森 勉
副理事長	深山 明敏
副理事長	熊谷 猛
副理事長	白石 一郎
専務理事	奥村 快也
事務局長	山越 孝雄

公益財団法人 水交会

会長	齊藤 隆
副会長	吉川 榮治
理事長	赤星 慶治
専務理事	杉本 正彦
事務局長	長谷川 洋

航空自衛隊退職者団体つばさ会

会長	片岡 晴彦
副会長	齊藤 治和
副会長	溝口 博伸
副会長	戸田 眞一郎
副会長	片山 隆仁
専務理事	藤田 信之
専務理事	若林 秀男

『あの戦争を振り返り戦没者の の霊を慰める』 第一回

東京裁判研究者

元くらしき作陽大学教授

松元 直歳

まえがき

この度、数十年来の旧知の友人で、現在は（公財）『大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会』の事務局長である國澤輝生氏より、その広報誌『慰霊』への、数回にわたる寄稿を求められました。氏はその発行人でもあります。編集人である圓藤春喜氏ともお話ししたところ、「戦没者は侵略戦争に加担し無駄死にしたとの思いを払拭したい」との由でした。さて勿論、この様な根源的な問に対しては、浅学の小生のよく答え得るところではありません。

然し、さはさりながら、この間について、は小生も、若年時より常に心中に温めてきたものであったのも又、疑いのないところでありました。50歳での会社員からの転身後、限られた時間の相当部分を、微力も顧みず、極東裁判（極東国際軍事裁判）の調べに割いてきたのは、その根っこにこの感情があったからのことでした。

そこでもはや老境の身となった現在、

つたない研究の成果を纏める、最初にして最後の好機到来と、非力を顧みず、國澤氏の申出に乗じることと致しました。

なお、本報告によつて「戦没者の様々な想念に報いるとは、自己の能力の能う限りの努力を尽くして、戦争の実相と真相を報告することである」と念じている事を、先立つて申し述べておきます。

変更のあり得る事を前提として、現時点では、概略、以下の内容を予定します。

第二回 世界戦争時代への前奏曲

- ・二十世紀戦争史の修正を申し立てる
- ・アングロ・アメリカンの有力少数説
- ・J・F・C・フラワー著『西洋世界の決定的戦闘及びその歴史に及ぼした影響』第3巻『アメリカの南北戦争から第二次世界大戦の終了まで』が描写する日露戦争と明治維新。

第三回 第二次大戦—欧州戦争及び大東亜・太平洋戦の開始

- ・戦略問題、人種問題に関わる戦争発生原因。
- ・一大不首尾のヴェルサイユ条約
- ・欧州戦の開始に関わる独ソポーランド分割 ナチス・ドイツ、ソビエト・

ロシア、英仏米政権。

- ・大東亜・太平洋戦の開始に関わるルーズベルト政権の「裏口からの参戦」工作、ハル・ノートと日本応戦の可否。

- ・『ヴェノナ』が語るルーズベルト政権の左派の実態及びソビエト・コミンテルンの活動が戦争に及ぼした力。
- ・日本の「緒戦の勝利」が被植民地人を鼓舞した事情。

第四回 第二次大戦のプレイヤーたちと戦争イデオロギー

- ・「奇妙な同盟」というべきであった連合国。
- ・連合国と枢軸国の指導者たち。
- ・被植民地国家アジアの指導者たちが狙った戦争の目的。
- ・ともに敗れたのかドイツの「生存圏」構想と日本の「大東亜共栄圏」構想。
- ・英米が唱導しながら実は顧みなかった「自由」と「民主主義」と「民族自決」の結末。
- ・躍動した勝利者ソビエト・ロシア・スターリンの共産主義イデオロギーと民族主義。
- ・近代戦を非人間的に変えた戦争イデオロギーとプロパガンダ。

第五回 第二次大戦の引ききと戦後処理

公益社団法人 隊友会

会長	藤縄 祐爾
理事長	折木 良一
常務理事	増田 好平
常務理事	吉川 榮治
常務理事	片岡 晴彦
常務執行役	田中 敏明
(総務担当)	
事務局長	植木 美知男

一般社団法人 日本郷友連盟

会長	寺島 泰三
副会長	森 勉
専務理事	越智 通隆
(兼編集長)	
常務理事	富田 稔
(兼事務局長)	

公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

会長	杉山 蕃
理事長	藤田 幸生
副理事長	岩崎 茂
専務理事 兼 事務局長	石井 光政

・戦争を長期化させ悲惨化させたか無条件降伏要求。

・国際法上前例のない二つの国際軍事裁判。

・ルーズベルトとスターリンの描いた戦後世界像。

・対独日占領統制。

第六回 第二次大戦が齎した新たな窮境と日本の活路

・誰が戦勝国であったか一大英帝国の退行と欧米植民地帝国の植民地喪失、共産主義者が手にした戦利品。

・欧州の列強と小国が陥った困難ーソビエト・ロシアの脅威。

・支那が陥った困難ー中華民国敗北と共産中国実現を支援した米ソ。

・現在の米中間覇権競争の原点を教える日中米関係。

・実現しそうな世界統一政府。

・欧米の旧植民地国民族の曙光ーアジア諸国の独立。

・日本ルネッサンスのカギとなるか神道的態度ーメーソンの『神ながらの道』に聞く。

(注)『神ながらの道』米国人ジャーナリスト、メーソンによって昭和8(1933)年に初版が、昭和55(1980)年に新版が発行され、更に平成元年には『神道の本義』と名を変えて復刻・発行された。

但し**第一回**については、準備の都合上もあり、また求められている「戦没者は侵略戦争に加担し無駄死にしたのか」に対しても紙背においては応じ得るものとして、米国第31代大統領ハーバート・フーバーの名著『裏切られた自由』に関する既掲載文を充てます。

旧友中澤茂和氏編集の令和元年5月20日付『時事評論石川』に寄稿した、『裏切られた自由』H・フーバー第31代米大統領の見た第二次世界大戦の実相ー「戦争」とはかくの如きものか」を、許諾を得て転載します。尚、第2回以降の論も、多くは『時事評論』よりの転載となることを、最初にお断りしておきます。

令和元年5月20日付『時事評論石川』『裏切られた自由』

H・フーバー第31代米大統領の見た第二次世界大戦の実相ー「戦争」とはかくの如きものか

さて筆者にとつては、昭和、平成につづく3世目となる令和の天皇を戴く御代とはなった。今95歳の母にとつては大正に続く4世目であるが、彼女は、満州の戦車隊長宅に奉公していたこと

がある。同じ大正生まれの亡父は、その数人の兄弟と共に大東亜戦に出征したが、一人の兄と一人の弟は戦死した。筆者が意識に目覚めた頃より「あの戦争」に無関心でいられたかったのは、人の子として当然であつたろうと思う。

然し、「あの戦争」に懐き続けた関心に基づく知識欲は、筆者の受けた日本の教育や言論からは満足させられ得なかつた。知識欲を満足させるための光明は主として、昭和の後期、平成を経て、嘗て戦つた米英より齎され始めた。ハミルトン・フィッシュの『ルーズベルトの開戦責任』、マクマリーの『平和はいかに失われたか』、クリストファー・ソーンズの『太平洋戦争とは何だったのか』、ガー・アルペロビッツの『原爆投下決断の内幕』、R・A・シオボールドの『真珠湾の審判』、ジョージ・モーゲンスターンの『真珠湾ー日米開戦の真相とルーズベルトの責任』、チャールズ・ビーアドの『ルーズベルト大統領と第二次世界大戦』等々、その他高品質にして膨大な量の証言と所見が、初めて筆者の疑念に安定した解釈を与えてくれた。

「令和」の時代となつて一層、「あの戦争」の実相を明かすこれらの努力が、腰を下ろして続けられる事を期待し、同時に今上陛下の靖國御親拝が実

謹賀新年

公益財団法人

大東亜戦争全戦没者

慰霊団体協議会

会長 島村 宜伸
理事長 山下 輝男
専務理事 伊藤 隆
事務局長 國澤 輝生

軍学堂

医療法人社団 伍光会

特定非営利法人 孫子経営塾

同台経済懇話会

株式会社 リエイト

株式会社 SNA

株式会社

キャリアコンサルティング

株式会社 再生日本21

株式会社 青林堂

法人

日本サイパンFRIENDSHIP協会

現する事を切望する。

周到に「企図」「計画」された日米戦争

さて本書は、第二次世界大戦時の米大統領フランクリン・D・ルーズベルトの直前の第31代大統領、ハーバート・フーバーによつて著された渾身の著作、「大企業」である。

この「大企業構想」は、真珠湾攻撃の数時間後に、フーバーの頭に浮かんだという。日米の戦争に関わる「全ての記録や回顧録を保存しなければならぬ」と。

フーバーの『裏切られた自由』の元原稿自体は、既に第二次世界大戦期、執筆が開始され、彼の死の昭和39(1964)年までには完成されていた。しかし、約半世紀の間「お蔵入り」を続けたのち、平成23(2011)年になって初めて、「FREEDOM BETRAYED Herbert Hoover's Secret History of the Second World War and the Aftermath Edited with an Introduction by George H. Nash」と題されて、刊行された。編者ナッシュの序文が付された。邦訳は、ハーバート・フーバー著ジョージ・H・ナッシュ編渡辺惣樹訳『裏切られた自由(上)(下)(副題省略)』として、漸く平成29(2017)年に草思社より出版された。

17) 年に草思社より出版された。

編者ナッシュによれば、『裏切られた自由』の中心的テーマは、当初は、「日本軍によるハワイ真珠湾攻撃までのルーズベルトの外交政策の批判」であつたが、次第に拡大し、「大戦期ルーズベルト外交」と「戦争の帰結・戦後ソビエト帝国の恐るべき拡大と共産主義者に対する冷戦の勃発(松元による直訳)」に及んだ。

筆者は、一読した結果、先ずは、あの戦争に関する「積年の疑念を、誠によく晴らされた」、と感じたのである。「そうか、そうか、日米戦争とは、この様に『企図』され、周到に『計画』され、米国の国力のまにまに『準備』され、巧みに巧んだ策謀によつて『開始』され、完膚なきまでに『遂行』されたのか」と。これらの戦争行為こそ、「東京裁判の日本人被告を、連合国が『平和に対する犯罪』として告発した行為類型そのものではなかったか」と。

同時に、日本と米・英・蘭との正規の戦争、中華民国との宣戦なき戦争、ソビエト・ロシアからの被侵略戦争、そしてドイツを中心とする欧州の諸戦争、即ち全体としての第二次世界大戦全体の実相を、嘗てよりは遙かに良く理解できたと感じたのである。

フーバーのルーズベルト、チャーチル批判

ルーズベルト、スターリン、ヒトラーと共に第二次世界大戦の主たるプレイヤーであつた英国の戦争指導者チャーチルは、ルーズベルトの「こんどの戦争をなんと呼ぶべきか」の問について、「自分は即座に、『無益の戦争』と答えた」という。戦後の1948年3月に、彼は自ら、そう記している(チャーチル著『第一次世界大戦』)。

更に、「前大戦の戦禍を免れて世界に残されていたものを破壊しつつした今度の戦争ほど、防止することが容易だった戦争はかつてなかった」と、のみならず、「数億の人間の凡ゆる努力と犠牲と、大義名分の勝利の後に・・・なおも平和と安全を発見することができず、今まで以上の一段と大きな危険に当面し・・・人類の悲劇は頂点に達している」と、平然と言ひ放った。無論チャーチルは、戦後世界が、共産主義的社会的主義的東側陣営と自由主義的資本主義的西側陣営の両陣営による「東西冷戦」に突入し、且つは人類社会において何よりも重要な「自由尊重の価値観」が一段と大きな危険に当面した、と主張したのである。



チャーチル



ルーズベルト



フーバー

しかし、かつてのどの戦争よりも「防止することが容易だった戦争」を自ら予期しながら、防止するどころか、「自由と法治主義を否定しこれを抹殺する共産主義ソビエト」と同盟し、米・英・蘭と諸国に大層の資源を投入させて、共産主義者とナチスによるヨーロッパ

自由主義諸国家の征服、全西ヨーロッパの全面的降伏を齎したのは、フーバーによれば、ヒトラーとスターリンの他には、ルーズベルトと並んでチャーチルその人であった。両名は、スターリンと合力して、バルカンと北・東欧諸民族国家の、自由主義的法治国家としての再興という、痛切な願いを一顧だにせず、虚言を以て足下に踏み躪った、と。のみならず、自由主義的法治に基づく再興を目指していた同盟国、中華民國の蒋介石をも裏切り、毛沢東の支那以下、北朝鮮、ベトナムその他アジア諸民族の共産主義立国を、或いは共産主義ソビエトによる衛星国化を齎し、以て、世界の共産主義化・社会主義化の実現に大いに助力して、戦後の「冷戦の世界」を導いた、と。

フーバーによれば、この両名こそは、当時世界を席卷しつつあったファシズムと共産主義という、人類にとつての二大巨悪の相互激闘による消耗を待って、然る後に、より現実的で健全な世界の構築に貢献できる力を持ちながら、大失政によって、戦前よりも遙かに危険な世界の出現に貢献した。人類の歴史上何よりも重要な「自由と法治の理念」を、英国は、経験主義的、漸進的に、明文は持たぬが誇るべき不文憲法の下で、米国は、近代諸国で初めての

成文憲法の下で、国是に懷いてきたのではなかったか。更には、「自由と法治」、「民族の独立と平等」、「相互理解」に基づく国際関係を、大西洋憲章等で他国にまでも唱導して来たのではなかったか？

フーバーによれば、この両指導者は、過酷なヴェルサイユ条約下のドイツ国民全体の屈辱感と窮状を全く理解せず、又、アジアの歴史に対する無理解と侮りにより「ガラガラヘビの如き日本」を挑発し、「巧みに巧んだ謀略」によって、合衆国を、「日本を通じての対独参戦」に導いた。

米陸軍省戦争計画部門の担当陸軍少佐として、「勝利の計画」を策定したアルバート・ウェデマイヤー將軍は、在ニューデリー連合国軍東南アジア地域部隊總司令官マウントバッテン卿英海軍提督の下で、日本からのビルマの奪還計画を指揮し、続けて中華民国蒋介石総統の参謀長兼米軍中国戦線司令官として、日本軍の岡村寧次總司令官に対峙したが、第二次大戦を次のように総括している。

「アメリカは、二度にわたる大戦で、方針を実行するためにではなく方針の欠如のために、血と財の上での至高の犠牲を払った。

戦争は目的を達成するための最後の

手段であり、且つそうでなくてはならない。戦争は方針に代用されてはならない。ルーズベルトとチャーチルは・・・手段を目的と混同し、全面的勝利を方針替えた。敵に無条件降伏を要求し・・・同盟国ソビエトとの間の我らの安全保障に顧慮を払うこともなく、文明国としての戦争目的を明確にして、この目的の最少費用での達成を求めるということをしなかった。」

戦犯裁判では大戦の実相は分からね

我々は、「無益な大戦争」の後であろうと、須らく「大戦争の責任者」を問うなどしがちであるが、果敢なき試みであろう。

戦争の国家指導者を裁こうとした「国際軍事裁判」を含む戦犯裁判は、確かに実施され、日独は、戦場の指揮官、実行者の他に国家指導者たちも処刑され、処罰された。然しそれは、「未だ存在しなかった国際法」による「戦勝国の力の行使」であって、「法の正義の実現」と言える代物ではなかった。それは、「法の支配の原理」のもとに将来目指すこととなる可能性のある、秩序立った「全体としての国際社会」若しくは「単体としての世界政府」へと向かう「有用なステップ」ともな

らなかった。この様な戦争犯罪裁判のみでは、戦争の実相を剔抉(てつけつ)することは不可能である。

戦争が、戦勝国と戦敗国の両当事者によって開始され、遂行されるものである以上、戦敗国のみならず「戦勝国側から見た開戦の事由と戦争遂行の実相」を把握する事なしには、「大戦争」の実相を掴むのが出来ないこと、理の当然であろう。戦敗国と同等に、否、若しくはそれ以上に勝利の見込みの高い当事者一はば結果的な戦勝国とみなしてよいであろう一ほど、より大きな戦勝の果実を期待し得て、開戦の魅惑に駆られようからである。

大戦争が「現実が発生した大事実」である以上、「大戦争の責任者追求」のみではなく、全体としての「大戦争の発生原因と結果一因果関係」を追うことが、真の「我々の責務」であり、且つは全く自然な「知的情動」でもある。

そして、「大戦争の主な発生動因」は、「個人及び集団」の、「私益と国益の果てしなき拡大を求める情念」と「自らの世界観・社会観を主張して止まぬ理念」と、「生存自衛の本能意識」に在ると言つてよいであろう。大戦争とは、「個人と集団間の」「情念と理

念と自衛本能による」「闘争と同盟と妥協の相互作用」であつたと、筆者は定義しよう。

本書『裏切られた自由』は、右に述べたような「第二次世界大戦という大戦争の実相」の、広範にわたる局面を詳細に観察し得る立場にあつた、第31代米国大統領ハーバート・フーバーによる著作である。

日本による一方的開戦・侵攻を否定

既述のとおり連合国は、ドイツと日本の戦争指導者を、各「国際軍事裁判」と「極東国際軍事裁判」にかけて、前例無き「平和に対する犯罪」を考出し、所謂「侵攻戦争」の「計画・準備・開始・遂行」を訴追した。然しこの戦争の「計画・準備・開始・遂行」は、まさにルーズベルト政権の採った行動であつた事も、示唆しておいた。

さて、第一次を含む先の両大戦の連合国軍の勝利においては、「当初の戦争当事者ではなかつた米国」の参戦が決定的であつた事に、誰も異存がないであらう。

その米国の第二次大戦への参戦は、唯々、日本軍の合衆国領土真珠湾への攻撃に対する米国の自衛権の発動によつて、突然、起つたものであつたのか？

なるほど、日本軍の真珠湾攻撃が、米国内の様々な類の意見集団・勢力集団の相違を捨てさせ、合衆国国民を「自国防衛という神聖な義務」に集中させたのは、事実であつた。

しかしこの日本の奇襲攻撃は、日本側に何の根拠もない一方的な対米侵攻であつたのか？対米開戦の前年、昭和15(1940)年末よりの日米交渉とは、何ゆえに必要であり、何を対象とし、どのような交渉内容と交渉姿勢によるものであつたのか？

フーバーは、他の有力な米・英の軍人、政治家、学究と共に、「日本による一方的開戦・侵攻」説を、明確に否定する。ルーズベルトの「浅薄にして偏頗な世界観と人間観」、異様な「狂人」としての人格が原因で、加えて「ニュー・ディール政策の失敗を糊塗し補完する手段」として「米国の第二次世界大戦への参戦」が考え出された、と。

「浅薄・偏頗な世界観」とは、「合衆国建国の理念である『自由』を副次的な価値基準としてしまった統制主義的政治観」、「共產主義とスターリンに対する過度の盲目的な親和性」である、と。「異様な人格」とは、「大統領選前後を通じて国民に繰り返し、非参戦を約束しながら、陰謀と秘術を尽

くして米国の参戦」を実現させたその行動に象徴されるが、対外関係においても、私的生活の上でも遺憾なく発露された、と。

結果としてフーバーの主張に同じる有力な米・英の軍人、政治家、学究の中から、英・米両国軍人の証人一人ずつを挙げておく。

英国戦史研究家フラー陸軍少将著『西側世界の戦史』は、次のように述べる。

「アメリカ軍の第二次ヨーロッパ派遣(第二次大戦)は、第一次派遣(第一次大戦)のときよりも悲惨な結果に終わった。このときの「戦争挑発者」はドイツ皇帝ではなくて、「アメリカ大統領」であつた。「アメリカ大統領」の「国家社会主義(筆者注…ここでは共產主義ソビエトではなくナチス)に対する嫌悪の情」と「権勢欲」のため、アメリカ国民はヨーロッパの戦争に投入され、そして再びヨーロッパ戦争が世界大戦に発展した。押収ドイツ公文書によれば、ヒトラーが西半球の攻撃を計画していたという、ルーズベルトの主張を証拠立てるものは皆無であり、アメリカが参戦するまで、対米戦の回避がヒトラーの希望の一つであつた事は明白である。」

米側よりは、既述のウエデマイヤー将軍である。戦後昭和22(1947)年には彼は、大統領トルーマンの要請により、中国と韓国に派遣され、結局政権によつて無視されたが後に著名となった、『ウエデマイヤー報告書』を提出した。余談ではあるが彼は、終戦直後、満州の日本人を蹂躪するソビエト軍をしり目に、在支那390万日本人の本国送還にも力を尽くした。当該報告書より引用する。

「ルーズベルトは、ドイツに対米宣戦をさせようとした極端な挑発行動も失敗し、アメリカ国民の大多数の参戦反対の決意も固く、アメリカ議会で宣戦布告の同意が得られる見通しもなかつたので、目を太平洋に転じた。実際、日本を強制して対米宣戦を布告させるよう、外交的、経済的に圧迫することは可能な状況であつた。そうするならば、日本はドイツ程、我慢強くないと思われた。これに対して日本は、その存在を危険にさらさずには後退できないまでに、あまりにも深く日支事変に突入していた。米国は、日本はその面目をつぶさないでは(日本が)現に保有している地点から撤退できないという、妥協の余地のまったくない提案を日本側におしつけた。」(続く)

ガダルカナル島の戦い

(一) 一木支隊の戦闘

岩田 司朗

○はじめに

大東亜戦争の開戦に伴う緒戦の攻勢は、ハワイの真珠湾攻撃をはじめとして、各正面とも予期以上の進捗を収めた。陸軍南海支隊及び海軍第4艦隊は協同してグアム島を攻撃し、昭和17年1月下旬にはラバウルとその周辺要地を攻略した。続いて3月、海軍陸戦隊に南海支隊の歩兵1コ大隊が協同し、東部ニューギニアのラエ、サラモア及びブーゲンビル島の特定地点に進攻した。5月にはガダルカナル島(以下「ガ島」と略称)とその北方フロリダ島のツラギを海軍部隊が占領した。

その後、珊瑚海海戦(5月上旬)、ミッドウェー海戦(6月上旬)を経て、昭和17年8月7日、連合軍の本格的反攻作戦が開始された。ガ島作戦の始まりである

ガ島転じて餓島となり、約半年にわたるこの作戦は、連合軍の本格的反攻に対する日本陸軍の最初の経験であったが、大本営の長期戦略見積の段階から、方面軍及び軍の統帥、作戦指導

海軍との協同、第一線師団以下現地部隊の戦闘等々各種の面で、多くの問題を残した。

本稿では、これらの諸問題に焦点を当てながら、文字通り屍山血河となつた激戦の経緯を明らかにしようとするものである。

1 開戦時における第二段作戦の構想

大本営は昭和16年12月の開戦時、第二段の作戦についていかなる計画、構想を持っていたのであろうか。

開戦時大本営陸軍部が計画した米英蘭に対する作戦は、南方作戦と呼称したが、計画の内容は南方要域攻略までの事項にとどまつて、攻略後の第二段作戦をいかに指導すべきか、ということに関しては、攻略した南方要域を確保する意図を明らかにしているほかは、なんら規定されていなかった。

大本営陸軍部が第二段以後の対米英蘭作戦に関してなんら計画していなかったことは、大いに批判の対象となるところであろう。当時大本営陸軍部の南方要域攻略後における作戦上の主な関心事は、重慶、ビルマ等の大陸正面であり、対ソ応変の態勢確立にあった。南方における作戦の主体は通商破壊戦及び航空戦であり、敵の決戦的反攻は洋上からする海空戦力によって行われ、そこに生起するものは、いわゆる

洋上艦隊決戦であり、それを主催するのは海軍であると考えていたのである。

大型機の最初の攻撃を受けた。東部軍司令部は初めて米軍機の来襲を認め空襲警報を発令した。

昭和17年1月10日、大本営政府連絡会議において、「情勢の進展に伴う当面の施策に関する件」が討議され、印度及び豪州と英米との交通遮断その他の方策が決定された。

米軍機は房総方面を経て飛来し、東京、横浜、川崎、横須賀、名古屋、四日市、和歌山、神戸、新潟を次々に攻撃して、午後3時半頃までに通り魔のように立ち去った。

大本営海軍部はニューカレドニア、フィジー、サモアを攻略(FS作戦と略称)して米豪の連絡を遮断し、かつ豪州の要域を占領して豪州を英米から分離させようと企図した。

この空襲は、ヨークタウン級航空母艦2隻(エンタープライズ、ホーネット)を基幹とするハルゼー提督指揮下の米海軍機動部隊所属のジミー・ドゥリットル中佐を指揮官とするB-25型爆撃機16機によるものであった。

しかるに3月頃から連合艦隊においては、FS作戦に先んじてミッドウェー、アリューシャン作戦を実施するを要するとの意見が抬頭し、4月5日、軍令部はこれらの作戦を優先実施することを参謀本部に提案した。

大本営陸軍部田中第一部長及び第二課は、本土に対する航空攻撃を防止することが今後の持久戦遂行上の最大の戦略であると認識し、敵の航空攻撃に対して新たな不敗態勢を考えねばならぬという空気が、作戦当局の間にわかに生じ、海軍のミッドウェー、アリューシャンの占領が失敗するようなことがあつては大変であるから、今までの経緯にかかわらず、陸軍も協力すべきであるとの意見が抬頭した。

陸軍としてはFS作戦のほかは、太平洋方面では守勢作戦をとり、独伊と提携して印度―西亜打通作戦に戦争終末促進の方途を求めるべきであるとの考えであつたため、ミッドウェー及びアリューシャンの一局地の占領は海軍陸戦隊のみでなしうであろうとの判断の下に、協同作戦を行わないこととした。

4 ミッドウェー作戦
大本営は5月5日、山本連合艦隊司令長官に大海令第18号をもって「連合艦隊司令長官は陸軍と協力し『ミッドウェー』島及び『アリューシャン』列

3 ドウリットル空襲

4月18日12時15分頃、突然帝都は米

島西部要地を占領すべし」と命令した。大本営は、5月25日、珊瑚海海戦の戦果を発表したが、この海戦で日本海軍は大きな戦果をあげたものと考えられ、米豪艦隊はほとんどわが敵でないとの感を持っていた。

6月5日から6日にかけて航空作戦が実施されたが、日本海軍は赤城、加賀、蒼龍、飛龍の4隻の航空母艦を失い連合艦隊は当海域から離脱した。

本作戦に陸軍協同部隊として参加した一本支隊（歩兵第28連隊基幹）は、当初内地瀬戸内に帰還させるよう定められたが、防諜上などの考慮もあつて、グアム島に集結、大本営直轄となった。

また、連合艦隊の機動部隊再建策の一環として第3艦隊、第8艦隊を編成、このうち第8艦隊は、「南太平洋方面における作戦に任ずると共に、東部ニューギニアの戡定及び同地以東の南太平洋方面占領地域の警備に任ずる」とこととなった。

5 第17軍の編成

昭和17年5月18日、FS方面作戦軍として第17軍の戦闘序列が下令された。開戦後において新しい作戦軍が編成された最初のものであった。

第17軍司令部は、5月20日陸軍大学校で編成を完結した。軍司令官百武晴吉中将は、陸軍通信学校長から転補さ



第17軍司令官 百武晴吉中将

れたもので、中將は陸軍の通信特に暗号の権威者であった。

第17軍司令部には後方関係の各部署がなく、少数の人員からなる各班及び班城班、軍政班があるだけだった。しかも参謀はわずか3名という弱体であった。

一方戦闘部隊の組織は戦略単位部隊がなく、歩兵3大隊を基幹とする部隊の寄せ集めであった。作戦軍というよりはむしろ守備軍ともいふべきものである。その致命的欠陥は、作戦の特質上絶対不可欠とする航空部隊、特に指揮連絡用の飛行機を欠くことであった。第17軍は軍としての兵力運用の柔軟性、弾力性の余地は全くなく、ラバウルに上陸後、軍司令部は単に統制監督機能を果たすに過ぎないものと考えざるを得なかった。

6月5日、6日に行われたミッドウェー海戦は、わが海軍の敗北をもって

終わり、戦力特に航空戦力が著しく低下したことにより、FS作戦取止めの決定、陸軍部は、7月9日、一本支隊の任務を解除して内地に帰還させるとともに、第17軍の任務を変更して、ポートモレスビー等ニューギニア要地の攻略に限定する措置を講じた。

6 ガダルカナル島への進出

(1) ツラギ攻略

ツラギの攻略は、ポートモレスビー攻略作戦の初期作戦として計画された。すなわち4月25日頃から航空攻撃を実施し、5月3日未明ツラギを攻略して、大艇を進出させ、これらの警戒のもとに攻略部隊をもってポートモレスビーに進出しようとするものであった。

呉鎮守府第3特別陸戦隊の一部は、ツラギ及びカブツの両島を5月3日以降占領して、横浜海軍航空隊及び一部の小艦艇の基地を提供した。7月1日第81警備隊の1中隊をこれに加えて、第84警備隊が編成された。

(2) 「ガ島」における飛行場の設置

現地海軍部隊では、以前からソロモン諸島方面に陸上航空基地の必要を認めて飛行場適地の搜索を行っていた。5月25日、第25航空戦隊の大艇1機がツラギに特派されて「ガ島」における飛行場適地の偵察が行われた。

その結果、「ガ島」北西部ルンガ川

東方海岸線から2,000m南方地区に飛行場適地を発見した。

その後、ミッドウェー作戦の失敗、FS作戦の延期・中止が決定され、「ガ島」飛行場の必要性は一層増大した。

7月6日第11設営隊（隊長以下1,221名）及び第13設営隊（隊長以下1,350名）が「ガ島」に上陸を開始、16日飛行場の設営が開始された。敵機の攻撃を受けながらも、作業は急速に進捗して、第1期工事（滑走路の長さ約800m、幅約60m）は8月



5日完成した。

設営隊の大部の人員は、いうまでもなく工具であつて、陸戦能力(小銃又は拳銃装備)を有する者は、第11設営隊約180名、第13設営隊約100名に過ぎなかった。

7 南太平洋方面に対する大本営の作戦方針

7月28日に発令された「東部ニューギニア作戦に関する陸海軍中央協定」では、南東方面の作戦目的は「『モレスビー』等の要地を攻略確保すると共に『東部ニューギニア』一帯の敵を掃滅し『ソロモン諸島』の利用と相俟つて珊瑚海を制圧するにあり」とされ、東部ニューギニア及びソロモンを連ねる要線で、珊瑚海に対して守勢を採る思想を提示していたが、特にソロモン方面の守勢作戦に関しては、大本営陸海軍部間に格別の研究討議はなされていなかった。

ニューカレドニア攻略作戦のための基地として設営された「ガ島」飛行場も、依然ほとんど無防備の状態におかれていた。しかも大本営陸軍部の首脳及び幕僚の大部すら、「ガ島」そのものの名前や、海軍によって同地に飛行場が設営されていることを知らなかった。それは海軍側から明らかに通報されていたのであるが、関心が薄いため

に軽視されていた。

8 「ガ島」に対する連合軍の反攻開始 (1) 反攻開始時の連合軍第一線の状況

7月31日フィジー島のコロを出港した主力部隊は、途中護衛部隊等と合同して態勢を整え、輸送船を中央に、巡洋艦、駆逐艦で囲む円形陣で進航した。総艦船82隻、上陸軍兵力1.9万を超える大船団であつた。

7日午前4時14分、巡洋艦2隻、駆逐艦4隻がククムとコリ岬間の目標に対して援護射撃を開始、2分遅れて巡洋艦1隻と駆逐艦3隻が、ツラギに向かって砲門を開いた。上陸開始はツラギが午前6時、ガ島が午前7時10分であつた。「ガ島」の上陸正面の海岸には日本兵の姿はなく、米軍の上陸は順調に進展、飛行場はほとんど無傷で占領された。

8月9日までに、「ガ島」に10,900名、ツラギに6,075名の兵が上陸を完了した。当初は橋頭堡の南側の防備が極めて脆弱であつたが、やがて第11海兵隊第2・第3大隊(75mm榴弾砲)第5大隊(105mm榴弾砲)が、橋頭堡の中央に全周射撃可能なように陣地を占領した。

(2) ツラギ所在部隊の戦闘

8月7日早朝、ツラギ所在部隊は突

然敵大部隊の来航を報じ、間もなく「敵兵力大 最後の一兵迄守る 武運長久を祈る」、「至近弾 電信室死守す」を最後として通信は途絶えた。

ツラギ方面所在部隊の戦闘に関しては、通信基地からのこの報告電報以外に、その実情を知る由もない。主として米側資料を基礎として第84警備隊の戦闘経過を推定すれば、付図のとおりである。

(3) 「ガ島」所在部隊の戦闘

「ガ島」所在の部隊にツラギ方面所在部隊のような勇敢闘を期待するのは無理であつた。第11、第13設営隊の大部は兵器を持たぬ工員であり、第84

警備隊ガ島派遣隊の兵力では、至る所上陸可能なルンガ岬付近を準備することは不可能であつた。

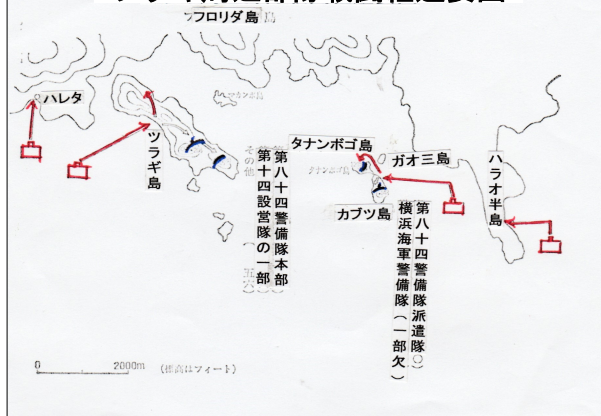
警備隊派遣隊及び設営隊は、付図に示す位置に配置されていた。各部隊とも付近一帯は大椰子林で、海は海岸に出なければ全く見えなかった。

7日早朝、各部隊は突如激しい砲爆撃に見舞われ、混乱状態に陥つた。電信機は破壊され一切の通信は途絶した。

同日夜、両設営隊は門前大佐指揮の下に、夜暗を利用して海岸線を西進し、小流の左岸に陸海両正面に対して陣地を占領し海軍本部を置いた。

8日の朝を迎え、南方高地に上つて

ツラギ周辺部隊戦闘経過要図



ガ島所在部隊行動概見図



見て、初めて敵艦船を目撃することができた。設営隊長は8日夜半、壮烈なツラギ海峡夜戦を望みし、日本軍大勝利と感じた。9日払暁から、海岸道をルンガ川の線に向かって前進を開始した。マタニカウ川を渡河し、そこから東方1,500mほど前進したところ

(4) 第1次ソロモン海戦

8日午前11時ブーゲンビル島東方海域から南下を開始した第8艦隊は、艦島海を先頭に縦陣列で、午後9時、ラッセル島北西35マイルの海域に進出途中、米駆逐艦をやり過ぎ、サボ島南岸に回り込んだ。

連合軍は米巡5、豪巡2を基幹に若干の駆逐艦を付けて、サボ島の北側に配備していた。

日本艦隊が先にその南側にいた部隊を発見し、午後11時38分「鳥海」がまず魚雷を発射、後続艦も相次いで発射し、重巡「シカゴ」及び「キャンベラ」に大損害を与えた。

第8艦隊は南側にいた部隊に一撃して左に変針、北方の部隊に向かった。「鳥海」と第6戦隊は敵の東方に、第18戦隊が敵の西側に突進し、直接照準

射撃距離で砲門を開いた。奇襲は再び成功し、日本軍の砲火は圧倒的で、大なる成果を収めた。真つ暗な海面の彼我至近距離の海戦は混戦状態になり、同士討ちの危険が生じてきたので、三川中将は零時23分、全軍の引き上げを下令した。

1時30分頃、サボ島北西に全艦の集結が終わった。ここで「再度突入」が問題になったが、既に魚雷はほとんど消耗し、また、日出までに敵空母艦機の攻撃圏外に離脱することが困難であるとの理由でそのまま帰航することになった。

かくして全然援護のない丸裸の米軍輸送船団を攻撃する最初的好機は去った。

(5) 状況判断の混迷

8月7日大本営海軍部は、ツラギ方面所在部隊からの緊急電報等を逐一直接傍受、当日行われた陸海軍幕僚の連絡研究の結論は、『敵海軍の船備及び空母の現勢力等からみて、「ガ島」及びツラギに対する敵の来攻は、偵察上陸の程度のものである。仮に敵が真面目な反攻を企図しているとしても、全般の情勢上、我が陸海軍部隊をもって「ガ島」及びツラギを奪回することはさして難事ではない。但し「ガ島」の飛行場が敵手に入るならば、爾後の

作戦指導上甚だ厄介となるので、即時奪回作戦に乗り出さねばならぬ。』というものであった。

現地部隊はもとより大本営も希望のない楽観的状況判断にとられながら、大本営陸軍部は、13日、第17軍司令官に対し「依然東部ニューギニア方面における作戦を遂行するとともに海軍と協同してソロモン群島の要地を奪回すべし」との大命を発令した。

この大本営の作戦方針等は、いずれも状況判断の誤りに基づくものであったが、更にこれに影響を与えたのは8月15日ころ大本営によせられた駐ソ武官の情報電報であった。その要旨は「米軍の『ガ島』方面作戦の目的は日本軍の飛行基地破壊であつて、この目的を達成した米軍は目下日本海空軍の勢力下にある同島よりの脱出に腐心している」というものであった。

第17軍司令部において、一木支隊の編入に伴う同支隊の早期派遣についての論議が交わされたが、第11航空艦隊参謀長の見解、更には13日22時30分「為し得れば一木支隊と海軍陸戦隊のみをもつて速やかに奪回するを可とする考え」である旨の参謀次長依命電報を受け、一木支隊の早期派遣を決した。

9 一木支隊の攻撃

(1) 一木支隊のガ島輸送

南東方面部隊においては、8月25日頃「ガ島」奪回作戦を開始する方針であったが、残存している敵が有力部隊ではないと判断されたことから、第17軍と協議のうえ、一木支隊及び横須賀鎮守府第5特別陸戦隊(以下、横5特という)をもつて「ガ島」奪回の方針を決定した。

一木支隊は歩兵第28連隊長の一木清直大佐の指揮する約2,400名の精鋭であった。

一木大佐は、実兵指揮に練達した部隊長で、陸軍の伝統的戦法である白兵威力による夜襲をもつてすれば、米軍の撃破は容易であると信じていた。

これはひとり一木大佐だけでなく、当時の陸軍を風靡していた一般的傾向であつて、大本営陸軍部もまたその戦法と一木支隊長の練達した指揮能力とに望みをかけていた。



一木支隊長 一木清直大佐

陸軍の精強に対する自信と米陸軍戦力についての過小評価に加えて、全般戦局の推移についての樂觀的誤判があり、この2つが各種の措置の樂觀的傾向を益々助長させていた。

第17軍司令官は、13日1500一本支隊長に対し「海軍と協同『ガ島』飛行場を奪回確保すべし、止むを得ざれば『ガ島』の一角を占領し後続部隊の来着を待つべし。これがため先遣隊(約900名)を編成しとりあえず駆逐艦6隻に分乗して『ガ島』に向い前進すべし」と下令した。当時の第17軍の意図は、先遣隊だけで攻撃を開始し飛行場を奪回する方針に傾いていた。

一本支隊は「ぼすとん」丸、大福丸の2隻に乗船していたが、この2隻はいずれも劣速船(最高9.5ノット)で戦機を失する虞があるので、南東方面部隊は第17軍と協議のうえ、これを二分し、先遣部隊は駆逐艦6隻で急派し、残余は横5特とともに船団輸送することとした。

8月16日0500、先遣隊及び第2梯団は「ガ島」に向けそろってトラックを出撃した。先遣隊は22ノットの高速で南下し、第2梯団は8.5ノットの低速で乙字運動を実施しながら進んだ。

この間、16日ころからガ島守備隊と

の連絡が可能となり、それによれば同地の敵は高射砲、戦車若干、及び機銃多数を有する約2,000名で、わが守備隊はマタニカウ川西岸に集結していることが明らかとなった。

一本先遣隊はフロリダ島東方からレング水道を経て、18日2030、タイボ岬西方泊地に進出、2100〜2300の間に全員が、一兵も損ずることなく駆逐艦の内火艇で揚陸した。

(2) 「ガ島」海軍部隊の状況

「ガ島」所在の海軍部隊は、米軍の来攻に伴い、8月7日マタニカウ川左岸地区に撤退、9日には友軍の反攻上陸を予期して一度マタニカウ川右岸に進出したが、米軍の西進にあい、再び左岸に復帰した。

同部隊は、8月9日以降第11設営隊長門前大佐指揮の下に、主力で小川左岸地区を占領し、一部でマタニカウ川左岸台地に前進陣地を占領していた。

19日早朝、約300名の米軍が発動艇によって、守備隊の占拠地域の西方コカンボナに上陸してきた。同時にマタニカウ川右岸の米軍も砲兵支援の下に行動を始めた。「ガ島」守備隊はコカンボナ方面の米軍に反撃を加え海上に撃退した。

(3) 一本先遣隊の戦闘

支隊長は、敵兵力は約2,000、

脱出に腐心しているとの情報により、第2梯団の来着を待つことなく攻撃を決意した。

19日0830、支隊長は、情報所設置のため一部を中川付近に、他に4組の将校斥候を中川から飛行場方面に派遣した。この情報所要員及び斥候群は、1430コリ岬の東方地区で、約1個中隊の敵と遭遇、交戦の結果全滅した。支隊は20日0230、レンゴに到達、大休止に移った。当時ルンガ岬方面に

は敵大発が行動しており、また11設営隊の宿営地跡と思われる地区には敵兵が活発に行動しているのが認められた。支隊は1800レンゴ発、2000テ

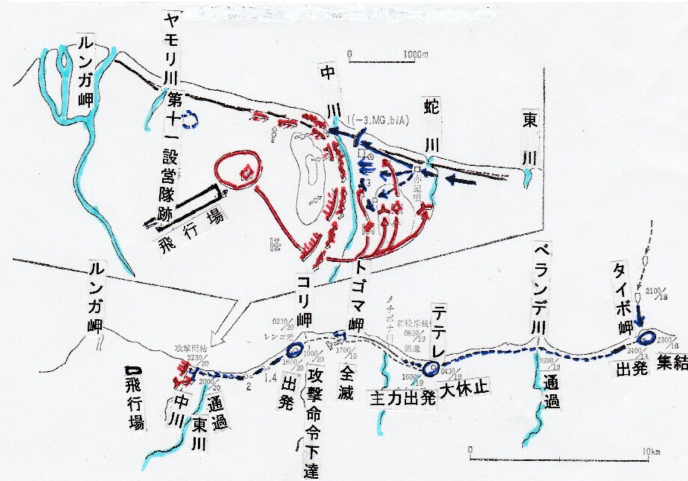
ナル川に到達した。2230尖兵が中川右岸100米に進出すると、少数の敵兵から射撃を受けた。この敵に追尾して同川右岸に進出、そこで支隊長は擲弾筒の集中射撃支援の下に、尖兵に敵陣地への突入を命じたが、思うようにならなかった。

支隊は21日未明、一部を中川正面に進め、主力は同川砂州から攻撃を開始したが、猛烈な敵の砲火に阻止された。午後には戦車6両も加わって反撃が続行され、支隊の背後を蹂躪された。将兵の奮戦にもかかわらず戦況は全く不利となり、1500ころ支隊長は軍旗を奉焼して自決した。部下将兵も支隊長に従って壮烈な戦死を遂げた。

日本軍は戦死777名、戦傷約30名であった。戦闘から離脱して後退した者、上陸点に監視のため残留したもの合わせて128名の生存者は、第17軍司令部との連絡に努めるとともに、後続部隊の来着を待った。

(続く)

一本先遣隊戦闘経過要図 (昭和17年8月18日～21日)



硫黄島戦没者遺骨収集 事業に参加して想うこと

姫路偕行会 曾田 孝一郎

明けましておめでとうございます。
令和元年度第1回硫黄島遺骨収集事業
(7月23日～8月7日)に参加した所
見を記述します。

一 派遣の経緯

私事で恐縮ですが、私は6年前に硫黄島の大阪山の遺骨収集に参加しています。

その1年後大病を患いましたが治療の甲斐があり、更に1年後に奇跡的に完治しました。

この命が永らえたことを誰に感謝すべきか思慮中に遺骨収集事業希望調査が届き、「これは大阪山で収集したご英霊のご加護では」と信じ応募しました。

そして昨年3月当慰霊団体から派遣参加可否の間合せがあり、即座に「要請に応じます」と返答しましたが、70代後半の年齢となった体力と健康の衰えが一番気懸かりでした。

「選考して頂いた団体と派遣団員に迷惑を掛けては」との重責？がのしかかり、以後体力づくりに励みました。

幸い健康面では常備薬は無く、食欲も人並みに回復していたので、後は壕内の蒸し風呂環境に慣らすことだと思いい、熱めの風呂に普段より長めに入浴して備えました。

これから参加される方の為に一筆添えますと、畑仕事ができる体力があれば十分で、ハードな作業はないので体調管理の方が重要です。確かに壕内は40度を超える蒸し風呂状態ですが、20分作業、20分休憩(壕外)の繰返し、午前午後も夫々三時間弱の日課です。勿論夏季の作業としては楽ではありませんが。

団員全員はもとより支援の陸自隊員や島管理隊の海自・空自隊員数名が加わり「一体でも多くの遺骨を搜索すべし」との強い想いで作業に従事しています。

そして発見した時の心情は「厳しい条件下でよく頑張つて下さいました。」と熱い想いが湧き出てきます。今後、慰霊団体から一人でも多くの方が参加されます事を希望します。

遺骨収集に携わった方でないとい味わえない戦没者に対する畏敬の念は、ご遺骨に手を合わせる度に色々な想像力を働かせて下さいます。

二 遺骨収集派遣団の人員構成

収集事業に参加した団体は9団体、

6年前と違い、主催は厚労省から日本戦没者遺骨収集推進協会に代わっていました。

団員は、青森県から鹿児島県までの出身者計32名(重機オペレーター3名と小笠原村役場職員1名を除く)、当慰霊団体からは壮年の横澤史穂氏と私の2名が参加しました。

派遣団は、2組(各16名)に分かれて、我々の組は250W-202の組を、他の組が地下壕①の搜索を担当しました。年齢は20代～80代まで、男女比は26対6の構成でした。

私達の組には夏休みの機会に遺骨収集活動に参加した女子大生1名が含まれていましたが、終始黙々と収集作業に携わり、又ご英霊(ご遺骨)に対する畏敬の姿勢を見る度、ご遺骨から彼女へ感謝の声が聞こえて来るように感じたのは私だけではないと思います。

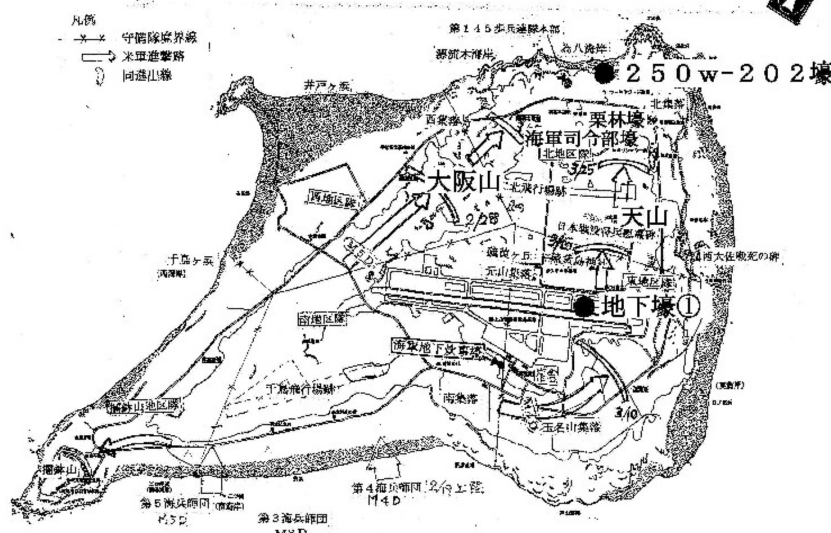
前回参加した大阪山でも女子大生3名が参

加していました。同じように感じたことを思い出しました。

三 遺骨搜索収集作業 壕番号250W-202 (地図参照)

現在の島は、戦争当時と異なり、島全体が亜熱帯植物で覆われており、壕を探し遺骨を搜索するために接近路を構築し、壕出入口が崩壊しないよう安

硫黄島戦闘経過と遺骨収集派遣関連図



全化する工事も行われており、遺骨収集作業が困難化している要因の一つと考えられます。

日課は季節によって異なるかも知れませんが、朝食5時45分、朝礼7時20分、宿舎前出発7時30分、壕入口で作業準備後概ね8時より収集作業が開始されます。終日大雨や強風時は作業中止になりますが、硫黄島はスコールが頻繁に発生し、それが過ぎ去るまでは休止となります。

作業手順は先ず壕入口で「遺骨の搜索を開始させていただきます」と全員で拝礼し、陸自化学科隊員が温度・酸素濃度計とガス検知器を持って最深处まで探知し、安全を確認してから、



250W-202壕入口付近の状況



壕内作業の状況

数珠状に結ばれた電灯コードを壕内壁に吊るして照明、入口から小型の折畳式円匙で堆積した土を（遺骨や遺留品が埋まっている為）ザルに入れ、慎重に壕外へ手渡しで搬出します。

遺骨が発見されるとその周りの土を丁寧に掘り起こし壕外でフルイに掛けて小さな遺骨も見逃さず収集します。

不発弾が発掘されると直ちに陸自不発弾処理隊員に回収を依頼、一日の作業が終了すると再び壕入口で「本日の作業を終了し、明日も搜索収集に参ります」と拝礼し、又遺骨は白布に包んで、奉持した人を先頭に一列縦隊で仮安置所に行つて安置し全員で拝礼します。

私達が搜索した壕は狭い谷間に崖の



回収された遺留品の一部

様にそそり立つ谷底に掘られていました。普段は枯れ谷で、雨が降ると谷底に水溜り場を設けて浄水器で飲料水を得ていたと想定されますので配属され

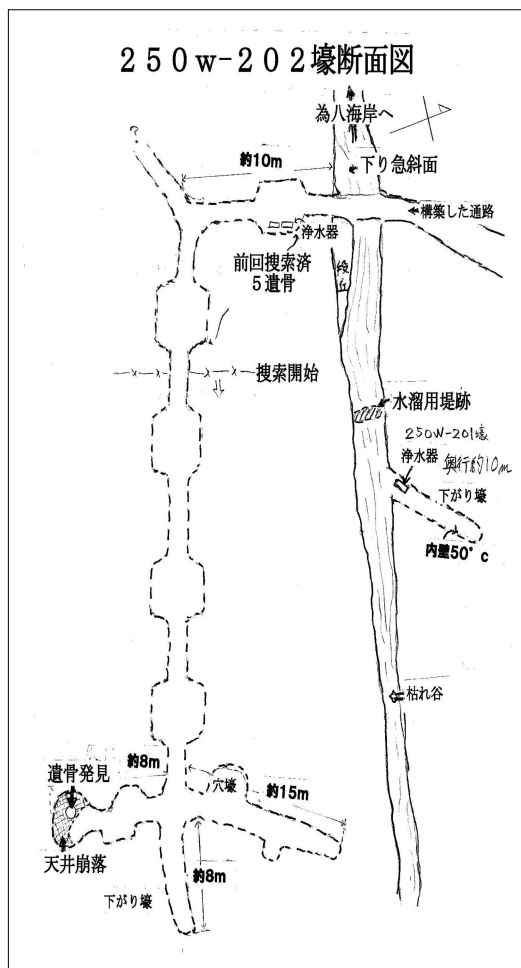
ていた防疫給水部が使用していたと考えられます。

硫黄島戦終末期には救護所を兼ねた壕ではなかったかと想像します。理由は遺留品の大半が防疫に備えた薬品と感染及び負傷した将兵の治療用薬品関係で未使用注射液・ビン類（点滴・薬品、飲料水用）が多数、浄水器（日本軍医学校製造・検査合格印が印刷）が2個、開缶した缶詰（内容品不明）が多数発見されたからです。

武器類は無く、手榴弾・小銃弾・拳銃用弾倉が多数回収されています。

その他米軍用ガンリン携行缶（米軍集積所から奪取したもの？）が1個回収されました。

四 遺骨発見状況





炊事兵数名の階級・氏名が刻まれた内壁

(地図と壕見取り図参照)

搜索した壕は、前回の遺骨収集団が半分搜索済で5遺骨を収容しています。攻防戦終末期に戦った壕であり、深部で多数のご遺骨が見つかるとの予想もしていましたが、動ける将兵は最後まで戦い散って逝かれたのか、今回は壕の最深部で1遺骨を発見収容しました。

「ご遺骨は最初遺留品(手榴弾)と共に指の骨が見つかり、掘り起こす度に天井部が崩落し堆積した土の中からバラバラになって出土しました。」

「ご遺骨は、壕内の高温多湿環境下で傷みが進み、大きな遺骨でも脆くなっており、収容には細心の注意が必要でした。収容ご遺骨は、防疫給水部隊の

将兵と考えられ、合掌拝礼の気持ちで湧いてきました。

海軍地下炊事壕も搜索しましたが遺骨は見つからず。炊事兵数名の階級氏名が刻まれた内壁と、巧みに掘削して作ったカマドが残っておりその出来栄えには感心しました。

尚、地下壕①を搜索した別の組は、2遺骨を収容しています。

五 課外的生活

午前中は11時に宿舎に帰りシャワーを浴び作業服を着替え11時40分昼食、午後は16時に帰りシャワーを浴び着替えて16時50分夕食、食堂は遺骨収集事業に派遣されている鹿島建設の社員食堂で、調理人の方が栄養に配慮した料理メニューです。

19時からのミーティング(約10分)以外は自由です。一番気になるのは洗濯で、3台しかない洗濯機(時間短縮モード)の順番取りとなります。6年前と異なり部屋は個室で、スマホの回線も繋がっているのです、課外は皆目室に籠もる生活であった。

娯楽室に集まりテレビを鑑賞したり、団員同志が談笑したりする姿は無く、従って団員相互の絆は薄くなっているように感じました。

私は厚目の書籍2冊持参しましたが1週間で読了、幸い電子辞書を持参し

ていたので時間を持て余すことは無く助かりました。

派遣期間中2日間休養日があり、1日は全員バスで島内の慰霊碑・記念碑・激戦地・有名壕等を巡り、2日目は団体での自由行動が許され、摺鉢山、南海岸、北海岸、守備隊各種壕等を徒歩で見学しました。

六 英霊から再考する国を護る心構え

竹島や北方四島等奪われた領土を取り戻すため我が国は国際司法裁判所訴訟や平和条約交渉で解決しようと60年も頑張っていますが、相手側は全く返還する考えは有りません。国民が一丸となって取り組んでいないからです。

「南西諸島を外国に奪われても「自衛隊が奮闘してくれる」と他人事のように考えている国民が多いのではと危惧しています。

憲法違反と批判されても国を護るために厳しい訓練を重ねている自衛隊員に感謝している国民は徐々に増えてはいますが、隊員募集が厳しい現状を考えると、国土を守る自衛隊がまだ若者に対して誇りある職業になっていないように思います。

硫黄島の英霊から「我が国土は我々で護る事を決して忘れるな」との叱咤の声が聞こえてきます。

事務局からの報告等

一 令和元年度臨時理事会の開催

10月31日(木)、当協議会会議室において臨時理事会を開催しました。本会議では、事務局から提出された議案等について熱心な討議が行われた結果、事務局案はそれぞれ原案通り承認されました。

(一) 議案等

- 第一号議案…平成31年度上半期職務執行状況(報告)
- 第二号議案…平成31年度上半期予算執行状況(報告)
- 第三号議案…令和元年度財産運用等(報告)
- 懇談・報告事項

・内閣府による立入検査受検結果について

・戦没者遺骨収集の推進に関する検討会議中間取りまとめ(概要)について

(二) 出席者

理事12名中8名、監事2名が参加

二 慰霊祭等への参加状況

①8月15日、日本武道館において行われた全国戦没者追悼式に、山下理事長以下2名が参加しました。

②9月11日、市ヶ谷駐屯地メモリアルゾーンにおいて偕行社主催の市ヶ谷台慰靈祭が行われ、伊藤専務理事が参加しました。

③9月23日、世田谷観音寺・特攻観音堂において行われた68回特攻平和観音年次法要に、國澤事務局長が参加しました。

④10月18日、靖國神社秋季例大祭に山下理事長が参拝しました。

⑤10月18日、千鳥ヶ淵戦没者墓苑において行われた奉仕会主催の秋季慰靈祭に、山下理事長以下2名が参加しました。

⑥10月20日、靖國神社御創立百五十年記念大祭に、伊藤専務理事が参加しました。

⑦10月21日、秩父宮ラグビー場内慰靈碑前で行われた学徒出陣追悼献花式に、國澤事務局長が参加しました。

⑧10月26日、靖國神社において行われた全国ソロモン会慰靈祭に、山下理事長が参加しました。

⑨10月27日、靖國神社において行われた第36回大東亜戦争戦歿全学徒慰靈祭に、國澤事務局長が参加しました。

⑩11月16日、慶應義塾大学三田キャンパスにおいて、慶應義塾戦没者

三 硫黄島戦没者遺骨収集派遣参加

今年度第1回派遣（7月24日～8月7日）に、偕行社から2名が参加され、酷暑の中無事作業を完遂されました。第2回派遣（9月25日～10月8日）は、水交会から1名が参加され、台風19号の影響で硫黄島からの離島が1日早まりましたが、所期の目的を達成し無事帰還されました。

また、第3回派遣（11月26日～12月11日）には、つばさ会から推薦をいただいた2名が参加されました。何れの派遣においても、劣悪な環境下での作業本当にお疲れ様でした。なお、1月29日～2月14日に第4回派遣が計画されています。

四 新入会員紹介（敬称略）

（令和元年7月1日～11月30日）

【特別会員】

NPO法人
日本サイパンFRIENDSHIP協会
代表理事 麓 雄介

【賛助会員】

青木 泰憲	秋元 紀子
飯田 典子	磯田 健一
鶴飼 雅彦	大塚 栄一

岡部 勝昭	奥谷 裕司
神永 大輔	河村 啓太郎
河村 健次郎	河村 峰子
川村 隆一朗	北後 顕児
小松 民子	榊枝 宗男
角 謙二	竹内 俊晴
辻 一夫	土居 一豊
内藤 壽美子	濱田 博士
藤田 浩和	松山 英明
森 将己	森園 安男
山本 勝久	渡辺 まさ枝
以上、特別会員1団体 賛助会員28名	

寄付金の税額控除に係る領収書等の送付について

当協議会は、租税特別措置法に基づく税額控除対象法人に認定されております。

従来、5000円以上の年会費・寄附金を頂いている方に領収書及び証明書（写し）を送付しておりますが、本年度も同様の処置をさせていただきます。なお、本送付は、12月中の発送を予定しておりますので、ご了承下さい。

また、5000円未満の方でも、確定申告にあたりこの領収書及び証明書（写し）をご希望の方は、ご遠慮なく電話・メール等で事務局までお申し出下さい。

新規会員獲得への協力をお願い

当協議会は、民間有志会員の皆様からお寄せいただく貴重な会費収入を頼りに、戦没者慰靈の事業を運営しております。

この国の大東亜戦争戦没者慰靈事業の永續と充実を希う、多くの皆様の当協議会への入会を心からお待ち申し上げております。

既会員の皆様には、お知り合いの方の入会勧誘について、格別のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

会員の区分と年会費は 次のとおりです。

一 賛助会員

（本会の趣旨に賛同する個人）
年会費 三〇〇〇円

二 賛助特別会員

（特別御芳志の賛助会員）
年会費 五〇〇〇円

三 正会員

（本会の趣旨に賛同する慰靈目的の法人・団体）
年会費 一〇〇〇〇円

四 特別会員

（本会の趣旨に賛同する企業・法人団体）
年会費 一口 一〇〇〇〇円
（一口以上）

*振込先口座番号（郵便振替口座）
〇〇一四〇一六・三三四九三〇